撮影：山田新治郎（表紙、並びに当ページ）

自由学園明日館

東京都豊島区

あどけなさがまだ残る二六人の少女が集った。「真の自由人を育てる」。そんな斬新な教育理念を掲げ、東京都西池袋に創立された女学校「自由学園」一期生である。開校は一九二一（大正十）年で、女性解放運動の起点となった時代とも重なる。創立者は、ジャーナリストの羽仁もと子・吉一夫妻。知識の詰め込みではなく、「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」の教育をモットーとした。一九三四（昭和九）年にキャンパスが東久留米市に移転した後は、「自由学園明日館」の名称で、学園の事業活動などに使われてきた。

設計したのは米国の巨匠、フランク・ロイド・ライト。弟子の遠藤新が知人だった羽仁夫妻に紹介した。中央棟から東西に連なる低層の建物は見事なシンメトリーを描く。この地を這うような連なりはライトのモチーフである「プレーリー・スタイル（草原様式）」と呼ばれるものだ。木造平屋一部二階建て延べ一、一五七平方㍍のコンパクトな建築で、優しく静かな佇まいを見せる。中央棟の二階中心部に食堂が設けられているのは、生徒自ら調理した昼食をとりながら交流を深めるなど、「生活しつつ」学ぶことを実践するための重要な空間として意図されたものだ。一九九七（平成九）年に国の重要文化財に指定されている。

中庭に面した一階ホールの縦長の大きな窓から、満開の桜が陽光に輝いて見えた。樹齢六〇年以上の四本の桜が植栽されている。庭の地面は花びらの「絨毯」で埋め尽くされ、言葉を失うほど美しかった。前の通りを可愛らしい保育園児たちが歩いていた。目が合った男の子が「こんにちは」と言った。「こんにちはー」。明日館の約百年の歩みとこれからの百年に想いを巡らせた。

樹齢を重ねた満開の桜は、静かに佇む建築とは対照的に、華やかさを増していた。一方でその眩しい花びら越しに見える幾何学模様の大きな窓は、軽やかに歌を口ずさんでいるようだった。瑞々しい桜とドライな低層建築。新緑へと向かう季節には、この草原のような建築が辺りを包みこんでいくのだろう